千代田学 研究成果まとまる

秋葉原マップ◆子育て支援

Akiba Recipe Project（アキバ レシピ プロジェクト）

千代田区のなかのさまざまな事がらを一つの学問として学ぶ「千代田学」。本学からは、米田嚴教授と福島義和教授（いずれも文学部）の「千代田区の子育て環境の整備」、栗芝正臣ネットワーク情報学部准教授の「QRコードを利用した街事典および観光支援コンテンツの研究開発」が08年度に選ばれ、研究を続けてきた。このたび区に提出した成果の一部を紹介する。

▲　使いやすい折りたたみ式のマップ

06年度は、千代田区・丸の内をフィールドにカード式のマップ制作に取り組んだ栗芝研究室。今回は、秋葉原を選び、4年次生が「Beginner」「パソコン」「電子機器」「Hobby」「文化・歴史」の5種類を折りたたみ式のマップにした＝写真㊤。さまざまな分野の店舗が狭い範囲に密集している秋葉原の、「集積性」「専門性」という魅力を生かし、文化や流行をカテゴライズしたことで見やすいガイドマップに仕上がり、容易に目的地にたどりつける仕組みになっている。

折りたたみマップ5種制作
秋葉原の「専門性」生かす

栗芝研究室

「すでにサブカルチャーの情報発信基地や観光地として認識されている秋葉原ですが、当初の学生たちの認識は、『メイド』、『萌え』といった程度でした。実際にフィールドワークに赴き、インタビューしてみることで、無線機器や電子機器、フィギュアやゲームなどのホビー、パソコンのパーツを扱う店舗が集中し、専門性の高い店舗が多いことが秋葉原の特徴だと理解を深めました。お店の人々の知識や専門性が大きな魅力であると同時に、専門的すぎて『秋葉原初心者』が敬遠しがちな傾向にあることもインタビュー調査からわかりました。本プロジェクトはアマチュアが『その道のプロ』になるための架け橋になるような、ステップアップのためのマップ制作を企画したものです」と栗芝准教授は話している。

▲　「さくら祭り」で大好評

折りたたんだ状態で、75×150ミリ、見開きで75×600～825ミリというサイズは、歩きながら見るのに適しており、洋服のポケットに収まるサイズ。デザインは、シンプルで上品ながら、ビビッドな色を採用し、表紙左上のマークは家紋をベースにした。QRコードで簡単に各店舗のWebサイトにアクセスできる。完成マップは、千代田区さくら祭りで配布し、好評を得た＝写真㊦。今後は、秋葉原の「Cafe MOCO」で入手可能。

（参加学生：片岡尊広＝代表、岡部紗佑里、鈴木遼太郎、綾部美希、和田あずさ＝敬称略）

子育て環境の整備

文学部の米田嚴教授（比較動態地誌学）と福島義和教授（都市地理学）は、07年度に「次世代育成・子育て支援プログラム策定のための基礎的調査研究」を行い、08年度は「子育て環境の整備」を共通テーマにまとめた。調査にはゼミ生や大学院生も参加した。

▲　本学も協力している地域で子育てを支援する取り組みの「たまたま子育てまつり」

女性の社会進出と子育ての両立を

米田　嚴教授

待機児童の問題を取り上げ、自治体や企業による「子育て支援事業」について考察した米田教授は、「子育て世代は、都心回帰の傾向が強く、職場近接型の保育施設の時間的、精神的メリットが大きいと考えられる。子育て環境の整備には財政上の裏付けが必要であるが、自治体に財政力の差が生じ、その結果として生じる地域差があっても、子育てや介護サービスに格差があってはならない。各自治体が財政構造の硬直化にどう向き合い、住民ニーズに応えていくかが問われている。

地域コミュニティ活用 子育て世代を支援へ

福島　義和教授

福島教授は、女性の働き方の多様化に伴い、子育て環境は家庭だけではなく、「地域コミュニティ全体での支援」で取り組む必要があると指摘。経済的支援、保育制度の整備、男性の育児参加が具体的レベルで提案されることが重要であり、子育て世代と企業、自治体、NPOなどとのパートナーシップが不可欠であるとしている。

「1・80という高い合計特殊出生率のフィンランドでは、国や保育所の充実した支援のもと、女性の就業機会が整っており、夫婦共働きが当たり前の社会である。その結果、男女平等社会が確立し、特に子育て世代の女性のたくましさがめざましい」と前置きし、「千代田区の地域活性化政策として、子育て世代のパワーが不可欠である。企業は社内保育園などの充実を図り、行政は居住地においてワークシェアなどによって生まれた貴重な時間を活用できる場（空間）を計画的に配置する。そして職場と居住地の関連性（近接性）を活性化することで、NPOなどの組織が生まれやすくなる。最終的には自治体に、子育て世代の住民ニーズに対応したフレキシブルな活動を期待した」と力説している。

研究ではフランスやイギリス、北欧の例から、女性の社会進出、就業機会の拡大は、子育てと両立することが分かった。世帯レベルの所得増大だけでなく、地域や自治体レベルでの担税能力の向上に寄与しているということも調査により判明している。長期的視点でみると、子育て環境の整備は、次の世代を存続させるための、現世代の義務であり、社会インフラ整備の一環として、保育サービスの一層の充実を図る子育て施策を推進していかなければならない」としている。

来た道をふりかえり

セクシュアル・ハラスメント防止委員会から

全国の大学でセクシュアル・ハラスメント（以下セクハラ）防止対策への取り組みが始まるのは1999年以降だといわれています。私の大学院時代は、防止対策はおろかセクハラの概念も一般化していませんでした。

当時の大学院にはまだ女性が少なく、女性だからと先生や先輩との飲み会の誘いも多く、私自身はそれを拒むことはできませんでした。

でも、女子院生のなかには、不当に強要された飲み会参加に異議をとなえて抵抗した人たちもいました。それに対しその時の私は、研究室の状況に違和感を覚えながらも、この現状を変えようと立ち上がる勇気はありませんでした。

セクハラとは、「本人の意図にかかわらず、相手を不快にし、差別し、脅威や屈辱感を与える性的言動」をいい、それはさらに人権侵害の行為であるとされています。人権とは「自分が大切であるという意識をもてること」であるなら、セクハラはまさに人権の根幹にかかわる問題であるのです。セクハラは、あってはならない行為です。セクハラによって人権が侵害されることとは、「自分が自分でいられなくなること」にほかなりません。

私のみるかぎり、現在の大学院の環境は、以前よりは改善されたように見受けられます。楽しいはずの交流の場にあって、悲しい思いをする人がいてはならないのです。

みなさんとともに、時代や社会のあり方のなかで変化する男女観に敏感でありつつ、セクハラについての理解を深め、セクハラを許さないキャンパスにしていきましょう。

（網野　房子）

ネットワーク情報学部生×登戸小学校6年生

理科教材作成に向け交流
地球模型づくりにチャレンジ

ネットワーク情報学部ツデザイン基礎演習を学ぶ学生約70人と川崎市多摩区にある登戸小学校（井上なおみ校長）の6年生約130人が、4月27日、生田キャンパスで、協力しながら地球模型づくりに取り組んだ＝写真。

本学の学生にとって小学生との交流は、実際のユーザーに触れ、相手の立場でモノをつくっていく視点・大切さに気付くことができる。「宇宙：太陽・月・星とその動き」の教材づくりにチャレンジする学生たちは、三角形のピースをつなぎ合わせ、20面体の地球模型をつくる指導をしながら、ピースの裏にあるクイズを出し、小学生たちの知識や、興味の中心を探った。今後、約2カ月半かけて「見て、触って、動かして」理解を深める教材を制作。7月中旬に同校で完成品を披露することとなっている。

セクシュアル・ハラスメント防止委員会　相談受付窓口

専用電話・ファクス　044(900)7858
e-mail sekuhara@acc.senshu-u.ac.jp
＊留守番電話、ファクス、メールで相談を受け付けています。守秘義務のある防止委員しかアクセスできないようになっていますので安心してご相談ください。

セクシュアル・ハラスメント防止委員会委員長
内山　哲朗（経済学部教授）

【防止委員会ホームページ】
http://www.senshu-u.ac.jp/campuslife